20世紀前半期の内モンゴル農耕社会について
－興安四省実態調査に見られる移住関係を中心に－

韓　　艶　麗*
Han Yanli
何　　暁　毅**
He Xiaoyi

Ⅰ．はじめに

周知のようにモンゴル民族といえば，まず遊牧民として想起される。ボルジギン・ブレンサイン氏が「今日のモンゴル世界は，もはや騎馬民族や遊牧民という一言で表現しきれなくなるほど多様化が進んでいる」[1]と指摘するように，中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族は農耕化や定住化が進行している。とりわけ内モンゴル東部地域[2]のモンゴル人は，一見したところ，漢人の農耕民と変わらないように見え，他地域のモンゴル人からは漢人に同化したモンゴル人と考えられている。しかし，今までの研究は遊牧モンゴルに関する研究が集中し，農耕モンゴルに関する研究はあまり見られない。ボルジギン・ブレンサイン氏によれば，内モンゴルの338万人の三分の二が東部地域の通遼市，赤峰市，ヒンガン盟に暮らしている[3]。しかし，内モンゴルの東部地域のモンゴル人が漢人に同化したという考え方や，遊牧モンゴル地域こそが「本当のモンゴル人」という捉え方などが，モンゴル人の立場に立って論じられているのか，そして現在のモンゴル社会が世界にありのままに伝わっているのか甚だ疑問である。

筆者は以上のような問題意識を前提として，本稿で1939年に満州国興安局が中心となって実地調査を行った『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』（以下ではランブントブ実態調査報告書と略する）と『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』統計編」の対象地域のランブントブ村落を取り上げる。具体的には，20世紀前半期の中国内モンゴルにおける東モンゴル人の農耕社会の形成過程及び移住関係に着目する。そして移住関係を親族関係・姻族関係・知人関係と分けて詳細に考察することによって，それらの親族・姻族関係や知人関係のネットワークの存在は地域形成にいかなる特色をもたらしたのかを解明していきたい。本稿で論じる村落は，事例として取り上げるランブントブという一つの村落にとどまらず，内モンゴルの東モンゴル地域農耕社会におけるモンゴル人によって形成された村落を念頭に置いている。

ランブントブ実態調査報告書は，20世紀前半期の中国内モンゴル東部のモンゴル社会の実情に関する具体的なデータであり，遡ること100年前のモンゴル社会の状況が窺える貴重な実地調査資料である。本研究は，現在の内モンゴルの東部の農

*中国長江大学外国語学院日本語学科講師
**山口大学・大学教育機構教授

1）ボルジギン『近現代におけるモンゴル農耕村落形成』横浜：風間房，2003年，1頁を参照。
2）主に内モンゴル自治の東部の農耕地域通遼市，赤峰市，ヒンガン盟をさす。
3）ボルジギン『近現代におけるモンゴル農耕村落形成』横浜：風間房，2003年，1頁を参照。

地図１．満州国の位置[4)]

地図２．興安四省の位置[5)]

耕社会を分析するにあたって，その歴史的な背景に重要な情報を提供できるという意義を持つ。

Ⅱ．対象地域における関連資料

1932年日本国は中国東北部に満州国を設立し，同年，満州国政府は，モンゴル人の自治区域を興安四省と設定した。内モンゴルの東側に位置する現在の呼倫貝爾市から興安盟，赤峰市，通遼市にかけての地域は満州国の興安北省，興安東省，興安南省と興安西省に属していた[6)]。

当時興安省の日本人職員とモンゴル人職員が参加して，1939年（康徳6年）から1941（康徳8年）年まで，満州国国務院興安局を中心しながら興安四省の11地点において現地実態調査が行なわれた[7)]。本稿では興安南省の科爾沁左翼中旗のランブントブで実施されたランブントブ実態調査報告書と同報告書に付属する「統計編」を取りあげて，詳細に考察していきたい。ランブントブ実態調査報告書では，ランブントブ村の各農家の親戚関係を大きく二つのグループに分けている。第一グループは富農1の曹氏（ランブントブ村の中心人物）を中心として農家番号の2，3，4，5，6，7，8，9，11，13，18，23，32，40，42により成り立ち，本村の柱として中心的な存在となっている。第二のグループは，農家7の金氏が中心的な人物で，農家番号の5，10，12，17，33，44，48により成り立っている[8)]。その中で二件四戸，すなわち農家番号11曹氏と5金氏，32陳氏と10王氏が姻族関係を結んでいる[9)]。当報告書では，前述のように当村の農家をグループに分けて血縁関係や姻族関係を示しているが，それは結局，調査年の1939年時点での親戚関係を表しているので，各農家の移住時に機能した関係（移住関係）を示してはいない。また「統計編」の農家略歴表，血縁関係図表では各農家の移住関係を親戚関係，知人関係と分けて取り上げているが，親戚関係を親族関

４）出所：www.google.co.jp/webhp，（2019年10月5日閲覧）より筆者作成。
５）出所：大満州国地図より筆者作成，（2019年10月5日閲覧）より筆者作成。
６）尾崎孝宏「モンゴル牧民の社会的結合に関する一試論―20世紀前半の東南南モンゴルにおける調査資料より」東京：『民族学研究』60（3）1996，234-248頁を参照。
７）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，1頁を参照。
８）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，121を参照。
９）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30頁を参照。

係と姻族関係に分けて論じていない。その上，誰を頼んで，どのような関係で移住しているのかが不明である。

当調査報告書は第一編社会制度，第二編土地関係，第三編経済関係により構成され，「統計編」には，第一表農家概況表，第二表農家略歴表，第三表家族構成表，第四表家族構成図表，第五表屯内農家血縁関係図表，第九表搒青（農奴）関係図表など十八表の統計表が挙げられている[10]。その中で，特に農家略歴表，屯内農家血縁関係図表，家族構成図表，貸借関係表が注目に値する。農家略歴表では，ランブントブ村の48世帯それぞれの種族，出身地，移住年，移住ルートや移住理由が示されている。この表は当村の48世帯の基本状況を確認する手がかりになる。屯内農家血縁関係図表は，当村の農家の親族関係や姻族関係を示している表である。しかし，この表では各農家の移住後の親族関係や姻族関係しか確認できない。移住家族構成図表は，当村の各農家の家族の構成員と年齢を示している。この図表は当村の各世帯における移住する際の年齢を計算できる表である。それは移住者の移住年齢を推測することにより，血縁関係図表に示されている姻族関係が，移住以前に結ばれたものであるか，移住以降に結ばれたものであるかを解明できる。貸借関係表では，当村における各農家の貸借関係人にある人々の親戚関係，知人関係を示している。この表から当時の貸主と借主は，いつ，どのような関係で現金や物の貸借を行っていたのかを窺うことができる。

Ⅲ．先行研究

従来からモンゴル族の歴史や伝統文化，遊牧生活に関する研究は数多く存在したが，近年，内モンゴルのモンゴル族の農耕化や定住化が深刻な問題となっていくにつれ，農耕モンゴル人に関して，様々な方面での研究が蓄積されてきている。主に，王玉海（1992，2000，2001），ボルジギン．ブレンサイン（2002），闫天灵（2004），珠楓（2009），王志清（2010），李宏・陳永春（2014）らの研究が挙げられる。

王玉海（1992）は，東モンゴル調査報告書や，地方誌などを参照し，清時代の内モンゴルにおける農耕村落形成について取り上げている。そして清時代における内モンゴルの農耕村落の形成過程における村落の種類や特徴を分類している。しかし王氏は特に，清時代における漢人の移住によって形成された村落とその特徴を取り上げてはいるが，モンゴル人移住によって形成された村落については詳細に論じていない。更に満州国時代の漢人やモンゴル人の移住についても触れていない。筆者は満州国時代のモンゴル人の移住によって形成された村落の特徴を検討する際に，王氏が指摘している漢人移住で形成された村落の種類や特徴が参考になると考えている。

また王玉海（2000）は，清時代における内モンゴル東部のジエリム（現通遼市），ジョスト盟（現遼寧省の一部），ジョウオダ盟（現赤峰市）の三盟を対象に史料を分析し，東モンゴル地域の生産方式，土地関係，社会階級，民族関係の変化を解明した。王氏は清時代のモンゴル人の生産方式の変化，すなわち牧畜から農耕への変化は，清時代の不適切な政策の産物であると主張している。そして王（2001）は，清時代の内モンゴル東部地域における農耕村落の住居の特徴について，一つの村が30世帯から50世帯まで規模を保ち，非常に密集して居住していると指摘している。前述のように，王氏は清時代の漢人の移住について触れているが，満州国時代のモンゴル人の移住について触

10）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，1頁を参照。

れていない。

闫天灵（2004）は清時代における漢人移民が，近代の遊牧モンゴル社会に変化をもたらした重要な原因であると指摘している。そして漢人移民により，モンゴル人が遊牧という生産方式から変化し，多様な職種を持つようになった一方で土地利用権をだんだん失ってきていると指摘している。

株颯（2009）は，様々な文献史料をもとに，18世紀から20世紀前期における内モンゴル東部地域への漢人移民の移住理由，経緯，定着，農耕牧畜の交差，モンゴル人と漢人の混住した社会の形成を取り上げている。その中で，東モンゴル地域の生活様式が，遊牧方式から農耕方式へ変化していく過程を解明している。闫（2004），株（2009）の研究では主に，漢人の移民や蒙漢関係によりモンゴル人の農耕化が進み，生活方式が変化してきたと述べられているが，モンゴル人が農耕村落を形成していく事例については触れられていない。

ブレンサイン（2003）は『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』において，満州国時代に日本人が調査した実態調査報告書，特にランブントブ実態調査報告書を中心とした文献史料とフィールド調査を結合した。主に，ホルチン左翼中旗地域の農耕化，地域社会の形成過程，移住民の移住ルーツを充分に検討し，当該地域の中心人物を取り巻く通婚関係や各民族との関係を解明している。ブレンサイン氏の研究は，ランブントブ実態調査報告書の統計篇を検討する際，貴重な先行研究となる。ただし満州国時代のモンゴル人が形成した村落における各農家の移住ルートや移住後の関係性を中心に取り上げているが，統計編の重要な図表である屯内農家血縁関係図表，家族構成図表，貸借関係表を用いてランブントブ村の各移住者の移住関係を，親族関係，姻族関係，知人関係と詳細に分類して考察を行っていない。

王志清（2010）は，1940年代に形成された遼寧省のモンゴル人村落である烟台営子村においてフィールド調査を実施した。主に烟台営子村の重要な人物である伊紹先を巡る移住民を分類し，民俗学の視点から考察している。モンゴル村落の移住者の移住関係は，モンゴル語が話せるか否か姻族関係に頼っていると大まかに触れてはいるが，詳細な移住関係まで考察していない。

李氏ら（2014）は，内モンゴル通遼市ホルチン左翼中旗の腰林毛都鎮塔林アイルと白菜営子村の漢人である李氏一族の1950年前後の移住歴を取り上げている。漢人がモンゴル村落に移住する最も手頃な方法は，通婚を通じた姻族関係で移住することであると指摘している。李氏らは，漢人がモンゴル村落に移住し，代々モンゴル人との通婚関係を通してモンゴル化し，モンゴル人村落に変化をもたらしたと述べているが，モンゴル人が形成している村落の特徴や構造については触れていない。

以上のように，清時代における漢人移住の状況,漢人移住の原因，漢人移住の原因によるモンゴル人へ影響に関する研究など，満州国時代における漢人移住に関する研究は比較的多いが，満州国時代におけるモンゴル人に関する移住を中心に行った研究は手薄である。そして興安四省実態報告書の統計編の農家略歴表，屯内農家血縁関係図表，家族構成図表，貸借関係表を取り上げ，モンゴル人が形成された村落におけるモンゴル社会の状況や移住関係に関する研究はまだ行われていないと言える。それゆえ筆者は，農家略歴表，屯内農家血縁関係図表，家族構成図表，血縁関係図表，貸借関係表を合わせて考察し，ランブントブ村の開拓人曹氏1世帯から48世帯までに広がった移住関係を詳細に分類する。そしてその村落の形成に至る中での，人間関係，距離範囲などを検討

していきたい。そして当時のモンゴル人により形成された村落社会のネットワーク，村落の社会的構造，村落の形成過程における特徴を解明していきたい。

Ⅳ．ランブントブ村落の概要

ランブントブという村落[11]は，1919年にモンゴル人の曹桑布（ソウサンブ）の一家が最初に本屯にトブ（假小屋）を建てて定着したのに始まる。村名は朗布（ランブ，曹桑布（ソウサンブ）の兄）の名を取って，ランブントブと呼ばれる。曹家一族は本屯の重要な構成部分を占めているが，曹家は幾代も以前から鄭家屯付近に居住して農耕生活を営んでいたのであり，それが，付近一帯が開墾されるに及んで，新天地を求めて，当村の開発に至ったのである[12]。

1939年当時のランブントブは，行政的にホルチン左翼中旗第六区第六村に属し，経済的には通遼や舎伯吐の市場と結びついていた。当村落の世帯数は59世帯[13]で，その付近において中等程度[14]の世帯数を持つ村である。経済面では富裕な村でもなく，貧困な村でもない，中位程度の村落である[15]。経済形態は農主牧従である[16]。

『ランブントブ実態報告書』では，当村の農家を農業耕作面積の大小に従い，富農群（100晌[17]以上），中農群（40晌以上），貧農群（20晌以上），極貧農群（20晌未満），搒青群，日工群（日雇い労働者）と大きく類別している[18]。また各農家の出身地により，本旗人，外旗人，抜戸人，漢人と分けている。本旗人とは，ホルチン左翼中旗の戸籍をもつモンゴル人である。外旗人とは，本旗出身以外の他旗に属するモンゴル人である。本旗人は，非開放蒙地を自由に利用し得る権限をもち，資力のある本旗人が，土地を開墾し，本旗において外旗人や漢人を招いて耕作する[19]。それに対し，外旗人や漢人の権利は，本旗人の権利に比べてやや薄弱なものとして，別個の取扱いを受けていた。たとえば，本旗において開墾の認められていたが，開墾の許可を得るためには，厳重な手続きと納税が必要であった。またその上，蒙地を開墾する際には，旗当局から本旗人に対しては墾費の援助をするが，外旗人には一切出さないのである[20]。すなわち，本旗において，二名以上の外旗人が相互に保障し合って，警察署に移住の届けを出し，旗当局には旗地開墾の申請をし，屯長，屯民の了解を得た後ようやく土地を開墾できるのである[21]。抜戸人とは，清朝初期，中期頃ホルチン左翼中旗の王公に降嫁した公主に付き添って移住してきた漢人あるいは満州人である。彼らは法庫県に居住しながらホルチン左翼中旗の戸籍をもち

11）尾崎氏の研究では，興安四省の実態報告書における調査地の単位を部落という用語を使うのが不適切だと指摘している（尾崎孝宏1996：236）。それゆえ本稿で村落という用語を使用する。
12）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，121を参照。
13）調査年の1939年の時点で48世帯であったが，1938年に11世帯の搒青は他屯に転出していた（興安局1939：119）を参照。
14）王氏の研究では，当時の村落の規模は10世帯から50世帯であると指摘している（王玉海2001：42）。そのため，48世帯を持つランブントブ村の規模を中位程度と決めているだろう。
15）報告書では，ランブントブ村は経済面で裕福な村でもない，貧困な村でもない中等程度の村であることを表記していた。（興安局1939：119－120）を参照。
16）ランブントブ村は，生業の重要な部分は農業に依存し，牧畜は上層農家の場合に副業的に行われている（興安局1939：151）を参照。
17）1晌は1haの単位である。
18）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，123－125頁を参照。
19）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，69を参照。
20）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，51－55を参照。
21）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，51－53を参照。

本旗人としての身分をもっている[22]。

ランブントブ実態調査統計編の農家略歴表によると，ランブントブ村には48世帯ある。そのうち本旗人は27世帯，外旗人は19世帯，漢人は2世帯である[23]。興安南省扎賚特旗実態調査統計編の農家略歴表によると，茂利図村には37世帯がある。そのうち本旗人は26世帯，外旗人は10世帯，漢人は1世帯である[24]。興安西省奈曼旗実態調査統計編の農家略歴表によると，西沙カ好来村は33世帯がある。その内訳は本旗人17世帯，外旗人7世帯，漢人8世帯である[25]。興安西省阿魯科爾沁旗実態調査統計編の農家略歴表によると，ハラトクチン村には20世帯がある。その内訳は本旗人19世帯，外旗人1世帯である[26]。このように，これらの村落は本旗人が多数を占め，外旗人や漢人が少数である。では，これらの本旗人，外旗人，漢人はどのような関係で当村に移住し，一つの村落を形成してきたのか。

Ⅴ．ランブントブ村落の形成過程

既述したように，ランブントブ村は，1919年頃ランブ（サンブの兄）兄弟が移住してから始まった。当村は，曹氏一族以外の他の移住者の中にも，曹氏と同じような経緯で移住してきた者が少なくない。彼らの場合，農耕は既に幾代も以前から生業となっていた[27]。こうしてみると，当該地域は曹氏一族を中心とし，曹氏及び他の移住者によって幾世代も前から農耕化され，主として農業を営んできたのである。ではなぜ，当時当該地域は開墾され，多くのモンゴル人が移住を余儀なくされたのか，そしてなぜ，当該地域は既に農耕化されていたのか。ブレンサイン氏は『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』という著書で，すでにそのことを解明している。ブレンサイン氏は，ランブントブ村に寄り集まった移住民たちの移住ルートを移住先から移住元へ遡って考察している。20世紀の初頭，ホルチン左翼中旗の未開墾地域におけるモンゴル人村落社会は，蒙地開墾で故郷を追われた本旗モンゴル人，外旗モンゴル人，清朝の初期頃，モンゴル王公に降嫁した清朝皇室の公主に従ってきた「抜戸人」満州人，そして直接モンゴル人村落に割り込んできた漢人など形成さていた[28]。では彼らはどのような関係でランブントブという村落に移住してきたのか。

さて「統計編」の農家略歴表[29]を基にすると，表3のように，ランブントブ村への各農家の移住年の順番により，農家番号，姓，群別，種族，出身地，移住地，移住関係を整理できる。そして各移住者の移住関係をランブントブ実態調査報告書「統計編」農家略歴表，屯内農家血縁関係図表，家族構成図表，血縁関係図表，貸借関係表をもとに考察していきたい。筆者はその移住順番を①から⑫まで並べているが，それは各移住者の移住年代によって分類したものである。その中で，⑤番と⑦番の移住年代が複数あるのは，移住人数が少ないため一つにまとめたからである。移住関係の欄の不明という表現は，移住関係が分からないということを表していることをここで特に明記して

22）ボルジギン『近現代におけるモンゴル農耕村落形成』横浜：風間房，2003年，190－198頁を参照。
23）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，2－16を参照。
24）興安南省扎賚特旗実態調査統計編　東京：新京，1939，6－10を参照。
25）興安西省奈曼旗実態調査統計編　東京：新京，1939，10－15を参照。
26）興安西省阿魯科爾沁旗実態調査統計編　東京：新京，1939，5－11を参照。
27）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，1を参照。
28）ボルジギン『近現代におけるモンゴル農耕村落形成』横浜：風間房，2003年，224頁を参照。
29）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，10－16を参照。

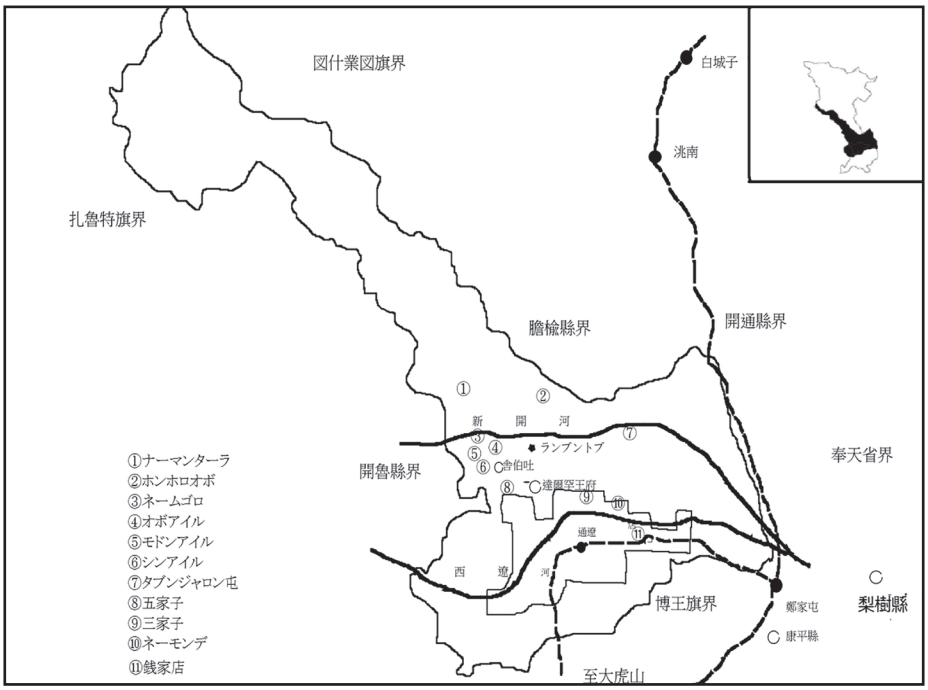
おく。

表３．ランブントブ村の48世帯の情報

移住の順番	移住年	農家番号[30]	姓	群別	民族	出身地	移動地	移住関係
①	1919	1	曹	富農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→ネーモンデ（⑩[31]）→本屯[32]	土地開拓者
		3	曹	中農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→ネーモンデ（⑩）→本屯	親戚関係
		4	曹	中農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→ネーモンデ（⑩）→本屯	親戚関係
		42	張	搒青	蒙	本旗人	ジャンレンボ屯→本屯	親戚関係
②	1920	7	金	中農	蒙	本旗人	遼源縣→本屯	親戚関係
		9	華	貧農	蒙	本旗人	ネーモンデ（⑩）→ホンホルオボ（①）→本屯	親戚関係
		13	曹	貧農	蒙	本旗人	梨樹縣→東夾荒→本屯	親戚関係
③	1921	12	金	貧農	蒙	本旗人	イントルト→本屯	親戚関係
		14	曹	極貧農	蒙	本旗人	遼源縣ホルトル→本屯	親戚関係
④	1922	10	王	貧農	蒙	本旗人	ハシヤト屯→本屯	親戚関係
		34	車	搒青	蒙	本旗人	ゴーホドク→本屯	知人関係
⑤	1925	48	黄	日工[33]	蒙	外旗人	吐默特左旗→東科後旗（アラハグン）鄭家屯→本屯	親戚関係
	1926	5	金	中農	蒙	本旗人	ボムダ→本屯	親戚関係
		6	呉	中農	蒙	本旗人	五家子努圖克（⑧）→本屯	親戚関係
		2	曹	富農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→本屯	親戚関係
		11	曹	貧農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→本屯	親戚関係
		18	呉	極貧農	蒙	本旗人	タブンゴル努圖克→本屯	親戚関係
⑥	1929	16	張	極貧農	蒙	外旗人	吐默特左旗ウルフ→ソール→本屯	親戚関係
		32	陳	搒青	蒙	本旗人	東科中旗ゲルホ屯→本屯	親戚関係
		44	チャル	搒青	蒙	外旗人	吐默特旗→オボネル→本屯	親戚関係
⑦	1930	17	韓	極貧農	蒙	外旗人	蒙古鎮→本屯	知人関係
	1931	39	曹	搒青	蒙	本旗人	ネーモンデ（⑩）→モドンアイル（⑤）→本屯	親戚関係
		40	陳	搒青	蒙	本旗人	パイダンダ→タブンジャロン屯（⑦）→本屯	親戚関係
	1932	8	曹	中農	蒙	本旗人	ネーモンデ（⑩）→モドンアイル（⑤）→本屯	親戚関係
⑧	1933	21	何	搒青	蒙	外旗人	吐默特左旗→アンタン窩堡→本屯	知人関係
		23	張	搒青	抜戸人[34]	本旗人	康平縣ポアル吐→本屯	親戚関係
		26	胡	搒青	蒙	外旗人	東科後旗オラインス→本屯	知人関係
		31	海	搒青	蒙	外旗人	吐默特左旗→本屯	親戚関係
		47	呉	搒青	蒙	外旗人	喀爾沁右旗→舎伯吐→本屯	親戚関係
		46	李	搒青	蒙	外旗人	吐默特左旗→アンタン窩堡→本屯	知人関係
⑨	1934	25	包	搒青	蒙	本旗人	ジョルゴガン廟→ホンゴルオボ（②）→本屯	親戚関係
		30	包	搒青	蒙	本旗人	茂林廟→本屯	不明
	1935	20	李	搒青	蒙	外旗人	蒙古鎮→チモト→舎伯吐→本屯	親戚関係
		28	戴	搒青	蒙	外旗人	吐默特左旗→西科中旗→本屯	知人関係
⑩	1936	15	高	極貧農	蒙	本旗人	巴音塔拉→本屯	親戚関係
		29	海	搒青	蒙	外旗人	吐默特左旗→本屯	親戚関係
		36	トウチ	搒青	蒙	本旗人	法庫縣→ナインゴロ→ロートチャン　→　ボルト→本屯	知人関係

30）農家番号は，実態報告書で貧富レベルの順番で並べている通りで作成した。
31）地図3に提示している番号を指す。
32）ランブントブ村を指す。
33）日工も農奴であるので，本稿で日工を搒青として扱うことにしたい。
34）ボルジギン氏の研究で，抜戸人は本旗人の役割と同じであると指摘しているので，本稿では本旗人の数に入れる。

		37	祁	搒青	蒙	外旗人	東科前旗　チョンブ→ネーモンデ（⑩）→エレネアイル→本屯	親戚関係
⑪	1937	19	陳	搒青	蒙	外旗人	蒙古鎮→本屯	親戚関係
		22	佟	搒青	蒙	外旗人	喀爾沁右旗→茂林廟→本屯	知人関係
		27	李	搒青	漢	康平縣	康平縣→通遼縣三家子（⑨）→本屯	知人関係
		33	白	搒青	蒙	外旗人	庫倫旗→本屯	親戚関係
		35	王	搒青	蒙	外旗人	庫倫旗→圖什業圖→本屯	親戚関係
		38	包	搒青	蒙	外旗人	吐默特左旗→オボアイル（④）→本屯	知人関係
		45	鄭	搒青	漢	遼源縣	没牛泡子→本屯	知人関係
⑫	1938	24	張	搒青	抜戸人	康平縣	康平縣　→三家子（⑨）→本屯	親戚関係
		41	李	搒青	蒙	本旗人	法庫縣王爺領→ボルト→本屯	知人関係
		43	洪	搒青	蒙	外旗人	東科前旗→八家子→本屯	親戚関係



地図３．ランブントブ村の各移住者活動地域

（出所：満州国国務院公安局（1939）『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』と同報告書「統計編」を参照し作成した。）

Ⅵ．ランブントブ村における各移住者の関係に対する考察

表３からみると，ランブントブ村の開拓年の1919年には，農家番号1の曹氏，3の曹氏，4の曹氏，42の張氏が皆「親戚関係」で移住している。ボルジギン氏は，その四世帯の関係について，農家番号1，3，4の三世帯の曹氏は兄弟関係で，張氏は当時搒青として移住したと指摘している[35]。しかし，血縁関係図表と家族構成図表によると張氏の母は農家番号3の曹氏の姉であり，1939年の時点で張氏は18歳である[36]。そうすると張氏は移住年の1919年には，まだ生まれていないことにな

35）ボルジギン『近現代におけるモンゴル農耕村落形成』横浜：風間房，2003年，161頁を参照。
36）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，29を参照。

る。こうしてみると，張氏の両親が曹氏と姻族関係で移住したのではないか思われる。それゆえランブントブ村の開拓年の1919年の移住者の富農1曹氏，3曹氏，4曹氏は親族関係で，42張氏は富農1曹氏と姻族関係にある。

1920年のランブントブ村の移住世帯の中では，農家番号7の金氏，9の華氏，13の曹氏の三世帯の移住関係については以下のように分析できる。

7の金氏は，血縁関係図表によれば，当村における「親戚関係」が見出せない[37]。前述したように，1919年には農家番号1の曹氏，3の曹氏，4の曹氏，42の張氏の四世帯が移住している。王玉海氏の研究では，一つの村落に移住する際に，何の関係もない人を入居させないと指摘している。また王志清氏の研究でも，村落の移住者の多くは姻族関係を頼っていると指摘している[38]。こうしてみると，金氏はその四世帯の誰かと「親戚関係」にあるのだろうと思われる。1919年の移住者は皆富農1の曹氏と親族ないし姻族関係である。だとすると，金氏も同様に富農1の曹氏と何らかの関係があるものと思われる。更に家族構成図表によると，農家7の金氏は，1939年時点では39歳であり，移住年の1920年には20歳である[39]。こうしてみると，1920年に移住する際，金氏は20歳の若年だったので，両親の意志で移住したのだろうと思われる。そこで，金氏の両親の誰かが1の曹氏と姻族関係であったのではないかと思われる。前述した推測からすると，金氏が富農1と姻族関係であったろうと思われる。

9の華氏は，血縁関係図表によると，富農1の曹氏と「親戚関係」にある。そして農家略歴表によると両世帯の移住元の地域はネーモンデであった[40]ため，華氏と曹氏はおそらく移住元の地域で姻族関係を結び，1919年の曹氏の移住により，華氏は1920年に曹氏の後を追って移住してきたのではないかと思われる。

13の曹氏は，血縁関係図表によると，富農1の曹氏，3，4の曹氏と親族関係である[41]。それらの曹氏の中で富農1の曹氏は一番の権力者であるので，13の曹氏は，富農1の曹氏との親族関係を頼って移住したのだろうと思われる。

上述のように，1920年の移住者の中で7の金氏，9の華氏は富農1と姻族関係，13の曹氏は富農1と親族関係で移住してきたことが分かる。

1921年のランブントブ村の移住世帯では農家番号12の金氏と14の曹氏の移住関係見ていくと，12の金氏は，農家略歴表によると，親戚の富農1の曹氏を頼んで移住したと記録にある[42]。ところが，血縁関係図表では，12の金氏と富農1の曹氏との親族・姻族関係は確認できない。そこで家族構成図表を確認すると，1939年の時点で金氏は62歳で妻も他界し，24歳の男の子と19歳の女の子の二人の子供がいることが見て取れる[43]。そうすると移住年の1921年には，金氏は44歳で，二人の子供は6歳と1歳位であったことが分かる。こうしてみると金氏の妻は富農1の曹氏と姻族関係であった可能性が高いと思われる。

14の曹氏は，農家略歴表には，親戚を頼って移住したと記されている[44]。前述したように1921年の時点では，1，3，4，13の曹氏一族と42の張氏，

37）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
38）王志清「集体的再习俗化农区蒙古族聚居村落形成的民族志—以阜新烟台营子村为例」『学术交流』2010，191頁を参照。
39）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，26を参照。興安局（1939：26）を参照。
40）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，10を参照。
41）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
42）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，10を参照。
43）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，26を参照。
44）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，13を参照。

7の金氏，9の華氏は当村に移住している。既に解明したように，1921年以前に移住した7世帯は皆，1の曹氏と親族ないし姻族関係である。こうしてみると，14の曹氏は富農1の曹氏と親族関係ではないかと思われる。

上述から12の金氏は富農1の曹氏と姻族関係，14の曹氏は富農1の曹氏と親族関係で移住したと思われる。

1922年のランブントブ村の移住世帯では農家番号10の王氏と34の車氏の移住関係については以下のように分析できる。10の王氏は，農家略歴表には，親戚を頼って移住したと記されている[45]。また血縁関係図表によると，10の王氏は7の金氏と姻族関係にある[46]。王氏は金氏と移住元で姻族関係を結んでおり，1920年に金氏が当村に移住した後，姻族の金氏を頼って，当村に移住したのではないかと思われる。

34の車氏は知人関係により当村に搒青として移住している。農家略歴表によると，移住元の誰と知人関係を持って移住したのかは不明である。

ここまでの移住者の11世帯の中で，1922年移住の農家10の王氏，34の車氏を除くと，みな農家1の曹氏との親戚関係で移住している。そして，車氏のように，当村において初めて知人関係により，個人の搒青として働きにきている者がいる。これは，当該地域社会のネットワークが広がり始めたことを示しているだろう。

1925年から1938におけるランブトブ村の移住世帯では1925年に48の黄氏が移住している。血縁関係図表により，48の黄氏は農家5の金氏と「親戚関係」であることが確認できる[47]。家族構成図表によると，黄氏は1939年の時点で50歳[48]であるから移住年の1925年は36歳であったことが分かる。黄氏の長女は18歳[49]であるので，黄氏は30歳前後で結婚したと考えると当村に移住する前に5の金氏と姻族関係を結んでいることが推測される。血縁関係図表によると，5の金氏は7の金氏と「親族関係」である[50]。当時5の金氏はまだ当村に移住していなかったので，黄氏は5の金氏を通して，7の金氏と遠い姻族関係で移住したのではないかと思われる。

さらに，1926年当村に移住した農家番号5の金氏，6の呉氏，2の曹氏，11の曹氏，18の呉氏の移住関係を見ていこう。血縁関係図表により，農家番号の2と11の曹氏は兄弟関係で，富農1の曹氏と親族関係であることが確認できる[51]。6と18の呉氏二人は兄弟関係で，彼らは富農1と一世代上の姻族関係である[52]ことが分かる。それで，その呉氏兄弟の二人は，親戚の富農1の曹氏の後を追って移住したのではないかと思われる。

5の金氏は，血縁関係図表によると7の金氏と親族関係で，48の黄氏と姻族関係，農家11の曹氏と姻族関係である[53]。すると当村に移住する際に頼りにした親族ないし姻族は誰であろうか。金氏家族構成図表によると，1939年の時点で5の金氏は39歳で，妻は21歳であり，11の曹氏は29歳で，妻は30歳である[54]。こうしてみると5の金氏は当村に移住する際に，11の曹氏とまだ婚姻関係を結ん

45）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，13を参照。
46）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
47）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
48）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，28を参照。
49）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，28を参照。
50）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
51）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
52）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
53）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
54）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，28を参照。

でいなかったのであり，当村に移住後，婚姻関係を結んだのだろうと思われる。既述したように，黄氏が金氏を通して7の金氏と遠い姻族関係により移住したならば，金氏も7の金氏を頼った可能性が高いと思われる。

上述した移住者たちの関係を整理すると，48の黄氏と7の金氏が姻族関係で，5の金氏は7の金氏と親族関係で，2の曹氏，11の曹氏は1の曹氏と親族関係で，6の呉氏，18の呉氏は富農1の曹氏と姻族関係である。

44のチャル氏は，農家略歴表には，当村に叔父がいたので叔父の家で働いていた[55]と記録されている。血縁関係図表によると，農家10の王氏はチャルの叔父にあたる人物である[56]。それらのことから44のチャル氏は，10の王氏と親族関係で移住したと思われる。

上述した三世帯の移住者の移住関係を整理すると，16の張氏は富農2の曹氏と姻族関係，32の陳氏は7の金氏と何らかの「親戚関係」，44のチャル氏は10の王氏と親族関係にある。

45の鄭氏は，表3を参照すると，原住地が災害に遭い，生活困難に陥ったため来住し，富農2の曹氏の搒青となった。そのことから，45の鄭氏は富農曹氏の2と知人関係にあったのではないかと思われる。

以上の当村の各移住者の移住関係を整理すると，19の陳氏は17の韓氏との姻族関係，22の佟氏は30の包氏との知人関係，27の李氏は富農1の曹氏との知人関係，33の白氏と7の金氏は姻族関係，35の王氏は10の王氏との親族関係，38の包氏は富農1の曹氏と知人関係，45の鄭氏は富農2の曹氏との知人関係にあったことが，移住の要因になったものと考えられる。

24の張氏，41の李氏，43の洪氏の3世帯の移住関係についてみていく。

張氏は，搒青関係図表には，「富農1の搒青であり，関係なし」と記録されている[57]。張氏は当村に「親戚関係」で移住したが，当村の親戚関係者は不明である。

41の李氏は，農家略歴表を参照すると，李氏の原住地がボルトであると記録があり，また，36のトウチ氏もボルトの出身である[58]。それで李氏は同じ出身地のトウチ氏と知人関係にあり，当村に移住したのではないかと思われる。

43の洪氏は，家族構成図表を参照すると，すでにランブントブ村に移住している搒青37の祁氏の妹と姻族関係を結んでいることが確認できる[59]。家族構成図表によると，洪氏23歳で，妻19歳である。ゆえに洪氏は移住する際に祁氏の妹と姻族関係を結んでその姻族関係により移住していると思われる。

以上の移住世帯の移住関係を整理すると，24の張氏は何らかの「親戚関係」，41の李氏は36のトウチ氏と知人関係，43の洪氏は37の祁氏氏との姻族関係により移住していることが分かる。

Ⅶ. おわりに

以上のように，筆者はランブントブ村の1919年から1938年までの20年間の各農家の移住関係を考察してみた。

まず，ランブントブ村の事例から，モンゴル人が形成した村落と漢人が形成した村落とには，ど

55）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，15を参照。
56）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
57）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，38を参照。
58）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，13を参照。
59）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，26を参照。

のような類似点と相違点が存在しているのかを整理していきたい。

当村の中心物である富農1の曹氏を取り巻く移住関係を見ていくと，1919年から1921年までの移住者8世帯は，すべて富農1の曹氏との親族ないし姻族関係にある。更に1938年になると，富農1の曹氏を取り巻く親族ないし姻族関係の移住者は，詳細な関係が不明なものを含めて，18世帯までに増加している。また第二グループの中心物となる7の金氏は，すでに解明したように1の曹氏と姻族関係である。つまり両グループ間にも姻族関係が存在している。こうしてみると，ランブントブ村における曹氏との親族・姻族関係を通じてたどることができる世帯数は，23世帯となる。このように全村48世帯の約半分が移住当初から村内に親族・姻族関係を持っていたことがわかる。

では，なぜ，当該地域に数多くの親族・姻族関係者が集中したのか。既述したように曹氏はランブントブ村において，初めて農地を開拓した人物である。それゆえ彼は，当該地域の重要な地位を占めている中心人物である。農家略歴表を参照すると，曹氏を取り巻く「親戚」たちについては，原住地の開墾，災害や土地の悪化，生活困難等のために移住しているケースが圧倒的に多い[60]。このように，当時，数多くの生活困難者は，曹氏のような有力な「親戚」を頼って移住していたのではないかと思われる。言い換えれば，当該地域は，大きな影響力を持つ中心人物を取り巻く親族･姻族関係により成り立っていたのではないか。一方，漢人が形成した村落を見ると，王玉海が指摘したように，漢人の村についても，一人の中心人物を中心に，地縁関係や血縁関係の人々が移住している。この点において，モンゴル人が形成した村落と漢人が形成した村落は類似していると思われる。しかし，王玉海が指摘したように，漢人が形成した村落の中心人物の中には商人や技術を持つ人が多数を占めている[61]という相違も存在する。つまり，モンゴル人が形成した村落は，蒙地開墾により，本旗人が未開地を開墾して形成した村落が多数であるのに対し，漢人が形成した村落は，商人や技術を持つ人々が中心となって村落を形成したケースが多数を占めていると言える。

では，モンゴル人が形成した村落の移住者は，元々どのような空間的な広がりを見せてきたのか。王志清が，モンゴル人村落には姻族関係の移住者が多いと指摘している[62]ように，ランブントブ村における1の曹氏の「親戚関係」の移住者の中で，姻族関係による移住者の数と親族関係による移住者の数は同数である。一方，7の金氏の「親戚関係」の中では，親族関係より姻族関係の移住者の数が上回っている。このことから分かるように，移住者は元の地域で姻族関係を結び，姻戚の移住により，姻戚の後を追って移住してきたのである。このように，姻族関係は一つの村落を超えた空間の範囲にまで広がっていたと思われる。更に，図1を参照すると，1の曹氏は7の金氏と姻族関係にあり，7の金氏は5の金氏と親族関係にあり，5の金氏は21の何氏と知人関係にあり，21の何氏は31の海氏と姻族関係にあり，31の海氏は29の海氏と親族関係にある。このように，当時の村落は，親族関係，姻族関係，知人関係の連鎖を通じて村落外から移住者を集めていたと思われる。また逆に言えば，そうしたネットワークの及ぶ範囲が地域なのであるとも言えよう。

60）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，10－17を参照。
61）王玉海「清代内蒙古农业村落的形成和特点」『中国边疆史蒂研究』1992，28－35頁を参照。
62）王志清「集体的再习俗化农区蒙古族聚居村落形成的民族志―以阜新烟台营子村为例」『学术交流』2010，191頁を参照。

更に，モンゴル人が形成した村落と，漢人が形成した村落の大きな差異として，モンゴル人村落に見られる本旗人，外旗人という構成は漢人村落では見られないことである点も指摘できる。

表1を参照すると，1919年から1929年までの移住者はほぼ本旗人である。1929年以降になると，外旗人の数が増えるが，その中では，労働者である搒青の数が圧倒的である。1938年になると，当村における搒青の総数は30世帯も挙げられる。しかもランブントブ実態調査資料では，調査年の1939年の時点で48世帯であったものが，1938年には11世帯の搒青が他屯に転出していた[63]と記されている。要するに，搒青の数はランブントブ村の過半数以上を占めていたが，かなり移動性が高かったと思われる。さらに農家略歴表によると，搒青の移住理由については，土地が開墾されたため，生活困難のため，土地や条件が良いところへ移住したいため[64]などの理由が数多く挙げられている。つまり，生活困難ゆえに少しでも土地や条件の良い居場所を目指して，移住を頻繁にしているのだろう。では，それら数多くの搒青はどのような関係で当村に移住しているのか。

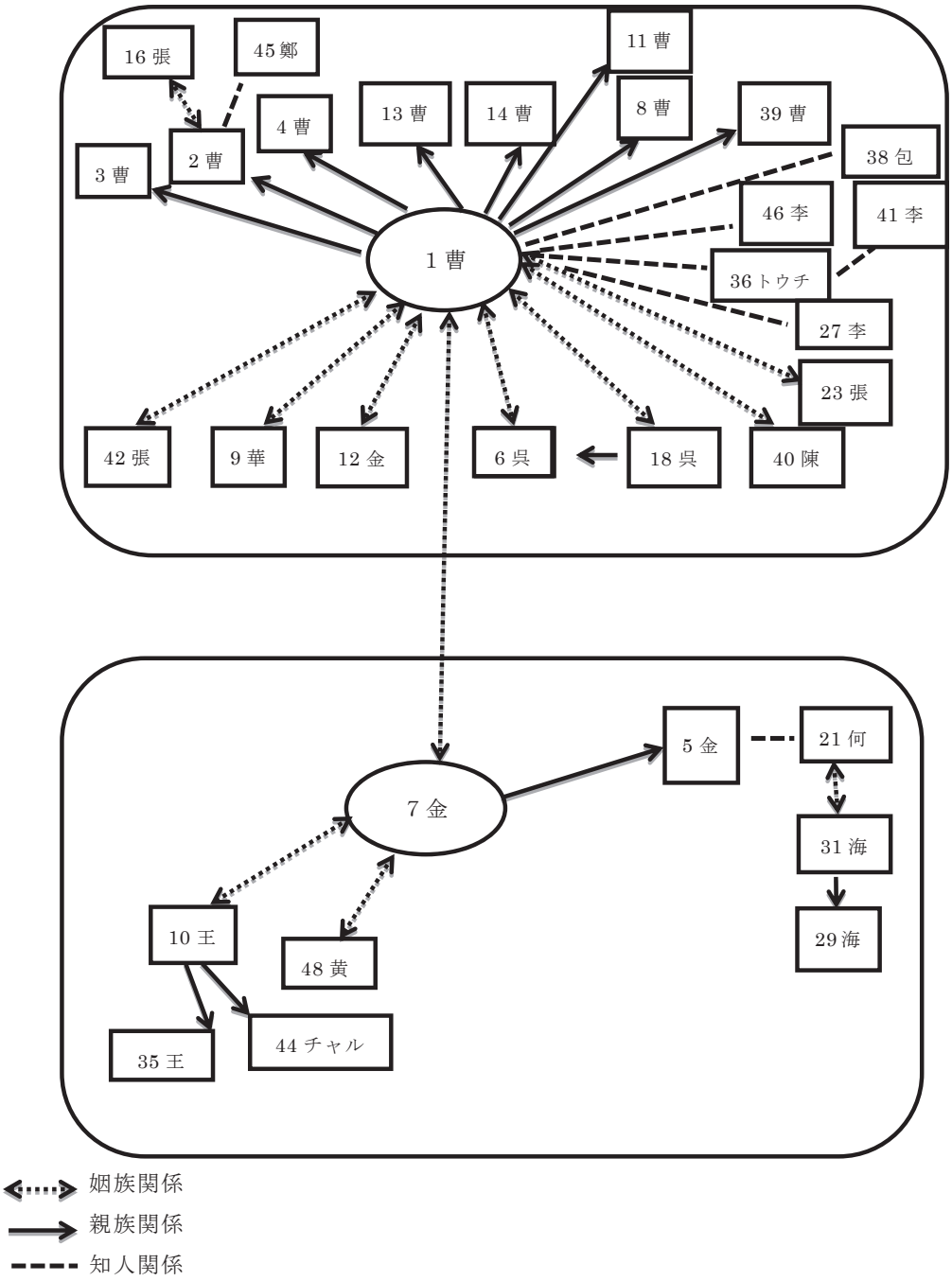
表1を見ると，ランブントブ村の30人搒青の中，外旗人が本旗人より圧倒的に多い。図1を参照すると，本旗人の搒青は1の曹氏との関係で移住している状況が多く見られる。他方，外旗人の搒青を見てみると，親族・姻族関係，知人関係の中では，知人関係による移住者が多い。一方で，多数の外旗人が，本旗人との何らかの親族・姻族・知人関係により移住していることも事実である。また血縁関係図表に示されている外旗人33の白氏と本旗人7の金氏の姻族関係[65]は移住後に結ばれていることはすでに解明している。農家略歴表には，外旗人16の張氏は「本屯来住後は儀父の搒青として生活，康徳四年10晌の荒地を開墾」，外旗人17韓氏は「最初の一年は搒青，次年度より小作10晌，次の年より小作20晌，康徳五年度より10晌の荒地を開墾自作」[66]という記録がある。すなわち彼らは，移住した際に搒青であったが，数年後に農地開墾を行い，極貧農にではあるが経済的に上昇できたのである。ここから分かるように，当時外旗人は当旗に移住後，本旗人と知人関係さらには姻族関係を構築，その後の旗内の移動に関しては，こうした関係性を頼る事例が多かったと言えるだろう。また両者間の関係が深まるにつれ，外旗人は当該地域で一定の地位を確保するようになり，外旗人の土地開墾の厳重な手続きが緩和されたのではないかと考える。

以上のように，本稿では，既存の調査報告資料の分析により，内モンゴル東部においてモンゴル人が形成した村落の特徴を論じることができた。モンゴル人村落は親族関係，姻族関係，知人関係の連鎖を通じて，地域にネットワークが広がっていったことが分かる。特に姻族関係による移住者の割合が多いということにより，新規村落の形成においては同一村落からの集団移住ではなく，村落を超えた空間的範囲から人々が村落に集まってきていたことが分かる。またモンゴル人村落に特有に見られる本旗人と外旗人の混住状態は，最初は土地を持っていない外旗からの移住者が，土地の開墾できる本旗人に雇われる形で形成された。そして外旗人は，本旗人との間に構築した関係を頼って更に旗内で移住を行うことで自身の利益の最大化を図り，場合によっては自己の農地の開墾

63）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，119を参照。
64）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，119を参照。
65）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，30を参照。
66）興安局『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京，1939，13を参照。

にも成功していたと思われる。今後の課題としては，ランブントブ村における現代社会の状況や変化を実地調査していくことを考えたい。

図１．ランブントブ村の親族関係，姻族関係，知人関係におけるネットワーク



参考文献（アルファベット順）

日本語文献

ボルジギン・ボルジギン（2003）『近現代におけるモンゴル農耕村落形成』横浜：風間房

満州国国務院公安局（1939）『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京

満州国国務院公安局（1939）『興安南省扎賚特旗実態調査統計編』東京：新京

満州国国務院公安局（1939）『興安西省奈曼旗実態調査統計編』東京：新京

満州国国務院公安局（1939）『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査統計編』東京：新京

尾崎孝宏（1996）「モンゴル牧民の社会的結合に関する一試論―20世紀前半の東南南モンゴルにおける調査資料より」東京：『民族学研究』60（3）：234-248

中国語文献

李宏・陈永春（2014）「试论内蒙古东部地区汉族移民蒙古化现象-以李姓一家为例」pp.130－131

王玉海1992a「清代内蒙古农业村落的形成和特点」『中国边疆史蒂研究』pp.28－35

王玉海2000b『発展与改革―清代内蒙古東部由牧向農的転型』内蒙古大学出版社

王玉海2001c「清代内蒙古东部农业村落的规模和布局」『内蒙古社会科学』pp.41－44

王志清（2010）「集体的再习俗化农区蒙古族聚居村落形成的民族志―以阜新烟台营子村为例」『学术交流』pp.189－192

闫天灵（2004）「论汉族移民影响下的近代蒙旗经济生活变迁」『内蒙古社会科学』pp.18－22

株颯（2007）「喀喇沁札萨克衙门档案与移民史研究-以早期汉族移民管理与移民稽查制度为中心」『蒙古史研究（第九辑）』pp.217－227

株颯（2009）『18－20世紀初東部内蒙古農耕村落研究』内蒙古人民出版社